

入所者にとって「自分らしい 療養生活」について考える

静岡県 医療法人社団 喜生会 新富士病院

○介護科 中澤 朋子

医 師 川上 正人

介護科 池田 奈穂

【はじめに】

当院では、身体拘束廃止や、事故防止に日々取り組んでいるが、入所者にとって「自分らしい療養生活」を送れているのか、正確な評価は行えていない。今回、アクシデントとインシデントに関する意識調査を行い、その結果について報告する。

【対象と方法】

- ①平成18年11月から平成19年4月の期間、看護・介護職員を対象に、アクシデントとインシデントに関するアンケートを行った。
- ②事故につながると予想される入所者の具体的な対処方法を看護・介護職員でディスカッションした。

「身体拘束」「インシデント」についてアンケート

1. インシデントについて

Q1.「インシデント」とは何かわかりますか？ はい ・ いいえ

「はい」と答えた方 何か記入して下さい。

Q2.「インシデント」を起ささないために気を付けている事はありますか？

2. 身体拘束について

Q1.「身体拘束」とは何かわかりますか？ はい ・ いいえ

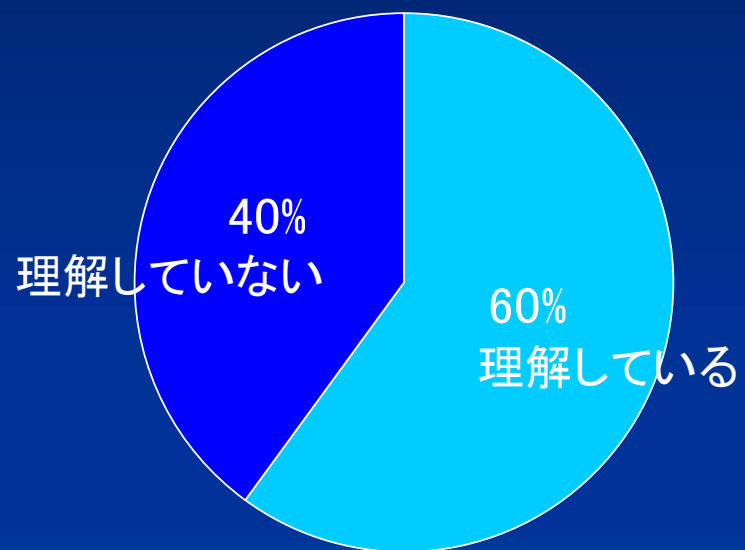
「はい」と答えた方 何か記入して下さい。

Q2. なぜ拘束をしてはいけないのか自分の考えを教えてください。

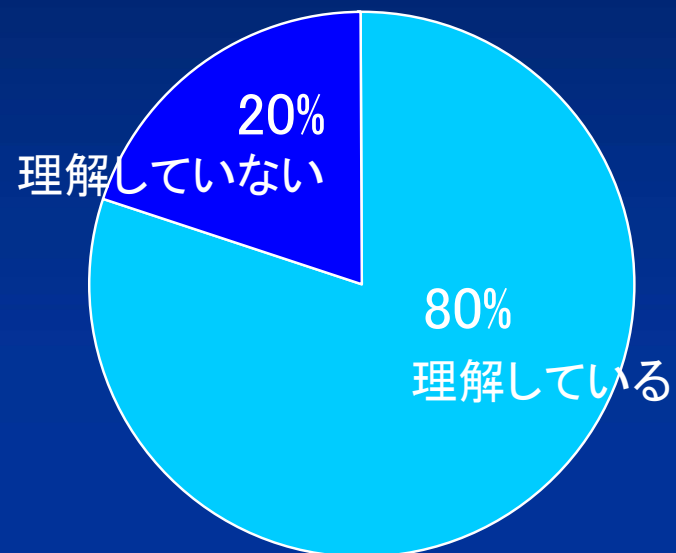
Q3. 拘束しないために気を付けていることはありますか？

3. これって拘束？これってインシデント？ 仕事をしていて感じていることがあれば
記入して下さい。

インシデントについて



身体拘束について



事故の起きやすい箇所と対策

居室

(ベッドからの転倒・転落)

- ・ ベッドの高さを一番低くする
- ・ ラウンドを頻回にする
(入浴・リネン交換時等、手の届かない時は看護・介護職員協力し見回る)
- ・ すぐ移動できるように車椅子をセッティングする(ストッパーを忘れないようにする)
- ・ 落ち着きがない時は目の届く所で見守りや、生き生き活動・散歩等にて気分転換を行う
- ・ 夜間見守りが必要な時は、Nsセンターに近い場所に一時移動し見守る
- ・ 必要に応じ、緩和マット・離床センサーを使用する

トイレ

(死角となり発見が遅れる)

- 必ず付き添う
- その場を離れる時はNsコールを押していただく
- 離れる時は、他のスタッフに声を掛けるとともに、離れても自分で確認する意識を持つ

ホール

(大勢の方が集まる)

- 一人でも過ごされている方がいれば、職員が必ず付き添う
- 食事前は5分おきに交代で見守る
- 食後落ち着きがない方からベッドに戻す
- 食後は入所者をベッドに戻すことを優先し、ホールの片づけを行う





車椅子ベッドサイドへセッティング時の様子



緩和マット使用時の様子



ナースセンター内での見守りの様子



ホールでの見守りの様子

【結果】

職員1人1人が、事故防止・拘束廃止に向け意識を持ち、行動するようになった。入所者の行動や言動から望まれる事を予測し、その情報・統一した対応を行うことで拘束はゼロとなり、アクシデントまでには至っていない。

平成18年度身体拘束結果

	4本柵	つなぎ服	ボディースーツ	ミトン	柵固定
H18 4月	1	0	1	1	0
5月	1	0	1	1	0
6月	4	2	2	0	0
7月	4	2	2	0	0
8月	4	0	1	0	0
9月	3	1	1	0	0
10月	1	1	2	0	0
11月	0	1	0	0	0
12月	0	0	1	0	0
H19 1月	0	0	1	0	0
2月	0	0	0	0	0
3月	0	0	0	0	0

【考察】

入所者の日常の中から本人の望むことを予測・察知し、安全・安楽に療養生活を送れるよう、不必要な身体拘束や事故防止対策等を日頃から検討する必要がある。

これからも職員一丸となり、ケア全体の向上、生活環境の改善を図っていきたい。

